

## 地域連携・研究センター企画展

川本 利恵\*<sup>1</sup>

### はじめに

平成28年(2016)度6月より、千代田三番町キャンパス1号館ロビーに展示ケース2台を常時置いて、1年を通じて展示を行うことになった。展示ケースの管理・運用は地域連携・研究センター(以下、「センター」という。)が所管し、展示企画・期間をセンターに申請して展示を行う。

今年度は、ローズ祭(大学祭)に合わせた企画の他に4月、11月、12月と計4回の企画を申込み、開催した。

### 1. 企画展「東京家政学院の学び」展

令和元(2019)年4月12日(金)から6月13日(木)にかけて「東京家政学院の学び」展(写真1)を開催した。これは新入生を迎えるにあたり、本学の創立者大江スミの建学の精神や授業に対する考え方を伝えるとともに、創立当初の学生の学びの内容がどのようなものだったかを垣間見る機会としてもらうために企画したものである。

大江スミ著作の教科書(写真2)や学生の講義ノートや和裁の部分縫い(写真3)を展示した。



写真2 大江スミ著作教科書

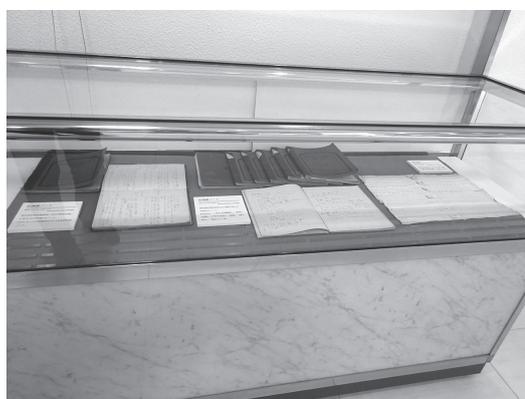


写真3 講義ノートと部分縫い



写真1 展示の様子

\*川本 利恵(かわもと りえ) 令和元年度生活文化博物館学芸員

## ※展示資料リスト

資料名	年代	大きさ	著作・制作者	備考
『家事实習教科書(全)』	昭和18(1943)年	20.3×14.3×1.0	大江スミ	河野要子(現姓:山下)使用 家政学院専門17回卒(昭和19(1944)年9月)
『礼儀作法全集』 全九巻	昭和13-14 (1938-39)年	21.1×19.3×1.2	大江スミ	河野要子(現姓:山下)使用 家政学院専門17回卒(昭和19(1944)年9月)
講義ノート 「西洋料理」	昭和元(1926)年	21.0×16.5×0.7		小池とみ子(小池登美、現姓同じ)使用 家政学院本科1回卒(昭和3(1928)年3月)
講義ノート 「日本料理」	昭和2(1927)年	20.8×16.0×0.9		小池とみ子(小池登美、現姓同じ)使用 家政学院本科1回卒(昭和3(1928)年3月)
部分縫い	昭和3(1928)年	49.3×37.0他		13点 柳原敏子(現姓:安並)使用 家政学院本科3回卒(昭和5(1930)年3月)
講義ノート	昭和4(1929)年頃	20.9×16.4他		7冊 ①園芸 ②割烹(中村先生)③衣類整理 ④和裁 ⑤割烹 ⑥婦人衛生 ⑦看護 柳原敏子(現姓:安並) 使用 家政学院本科3回卒(昭和5(1930)年3月)

## 2. ローズ祭企画展「東京家政学院の食器」

令和元年6月16日(日)から10月4日(金)までローズ祭企画展「東京家政学院の食器」(写真4)を開催した。

この企画の発端は、平成30(2018)年11月に人間栄養学科の加藤理津子准教授より、旧短期大学調理研究室で保管されていた洋食器類が見つかったとの連絡があったことである。その研究室に在籍されていた富永芳枝名誉教授のお話しによると短期大学が開学した頃の食器や昭和30年代頃の中学校・高等学校の調理の授業で使っていた食器とのことだった。さっそく実物を確認し、枚数が多いものについては保存状態を見て10点ずつ確保した。

創立者の大江スミは品質の優れた物を使うことを好まれていたので、その考えを受け継いで購入された当時高級食器を生産販売していた会社ノリタケ製の食器が多く残っていた。ノリタケ製食器の裏面には刻印が入っており、その形状によって年代を特定することもできたため、短期大学の申請期間から開学の年代に当てはまり、戦後昭和20年代の本学の動向を知る資料として活用できると考え、企画した。

中学校・高等学校で使用されたKVAマーク入りの食器とステーキ皿(写真5)、ディナー皿、サラダ皿、パン皿、カップ&ソーサーのセット、キャセロール、クリーマー、シュガー入れ(写真6)を展示した。

キャプションは博物館で作成し、解説文は業者に発注してパネル化した。展示作業は6月14日(金)に行った。会期が長いため、8月26日(月)に一部資料の入れ替えを行った。



写真4 展示のようす



写真5 中学校・高等学校で使用された皿



写真6 ディナーセット

※展示資料リスト

名称	年代	製造元	所蔵
洋食器の基本セット	昭和22～29(1947-1954)年頃	KIKUSUI社製	短期大学調理学研究室旧蔵
ステーキ皿	昭和30(1955-1964)年代	不明	短期大学調理学研究室旧蔵
洋食器の基本セット	昭和24～29(1949-1954)年頃	ノリタケ製	短期大学調理学研究室旧蔵
洋食器の基本セット	昭和29～41(1954-1966)年頃	ノリタケ製	短期大学調理学研究室旧蔵
クリーマー・シュガー	昭和24～29(1949-1954)年頃	ノリタケ製	短期大学調理学研究室旧蔵
キャセロール	昭和24～28(1949-1953)年頃	ノリタケ製	短期大学調理学研究室旧蔵
キャセロール	昭和28～37(1953-1962)年頃	ノリタケ製	短期大学調理学研究室旧蔵

3. 企画展「装束～引き継がれる雅の装い～」

令和元年11月6日(水)から12月10日(火)まで「装束～引き継がれる雅の装い～」展(写真7)を開催した。

今年は和暦が「平成」から「令和」へ変わり、新天皇の即位礼正殿の儀が10月22日(火)に行われ、天皇は束帯、皇后は五衣唐衣裳(十二単)を着用された。儀式の様子はテレビで放映されたこともあり、博物館研究員の正地里江先生(現代生活学部現代家政学科助手)(以下、「正地先生」とする。)から、衣装の雛形展示の提案があったので、解説やキャプション原稿も含めて正地先生に担当していただいた。

雛形は旧短期大学の研究室から移管された資料で、束帯は単(ひとえ)、裃(あこめ)、下襲(したかさね)、半臂(はんぴ)、袍(ほう)、大口袴(おおぐちばかま)、表袴(うえのはかま)、襪(しとうず)が一揃え(写真8)となっている。※襪とは親指の分かれていない足袋。

五衣唐衣裳は単、五衣(いつつぎぬ)、打衣(うちぎぬ)、表着(うわぎ)、唐衣(からぎぬ)、長袴(ながばかま)、裳(も)が一揃え(写真9)となっている。

天皇が着用された袍は「黄櫨染(こうろぜん)」という赤みがかかった黄色が用いられているが、天皇以外には使用できない色とされており、雛形の袍は黒の生地が使われている。

五衣には「かさねの色目」が考慮されており、「紅梅の匂い」といわれる組み合わせになっている。青(現在は緑色)の単の上に濃紅梅から淡紅梅へ、内側から外側へ同系色の薄い色を重ねる配色である。



写真7 展示の様子

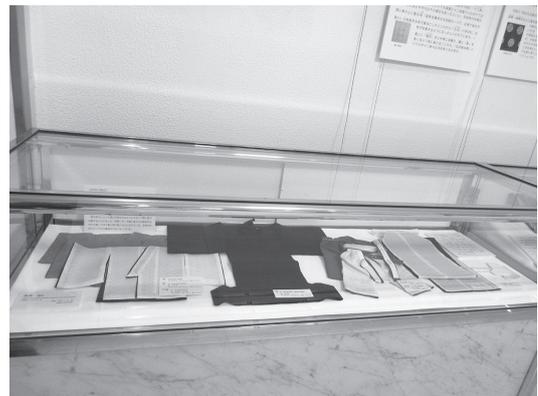


写真8 束帯



写真9 五衣唐衣裳

※展示資料リスト

資料名	年代	素材	制作者	備考
束帯 雛形	平成3(1991)年	絹	高倉文化研究所	男物、縮尺1/4
五衣唐衣裳 雛形	昭和61(1986)年	絹	高倉文化研究所(湯浅絢子製作)	女物、縮尺1/4

#### 4. 企画展「行く年、来る年」

令和元年12月12日（木）から令和2（2020）年1月30日（木）まで、「行く年、来る年」展（写真10）を開催した。

今年は新しい元号が始まり、西暦に統一するべきなどの議論がなされたが公文書には引き続き和暦が用いられることになった。これを機に、わが国のさらにもう一つの年を表す「干支（えと）」についての企画を考えた。正式には「十干十二支（じっかんじゅうにし）」と呼び、60年周期で繰り返す。日常的には「子、丑、寅、卯、辰、巳、馬、羊、猿、酉、戌、亥」の12の生物の名でその年を表す。

今回は令和元年の亥（写真11）と令和2年の子（写真12）の土人形を展示した。この企画は毎年末年始の企画にしたいと考えている。



写真10 展示の様子



写真11 いのししの土人形

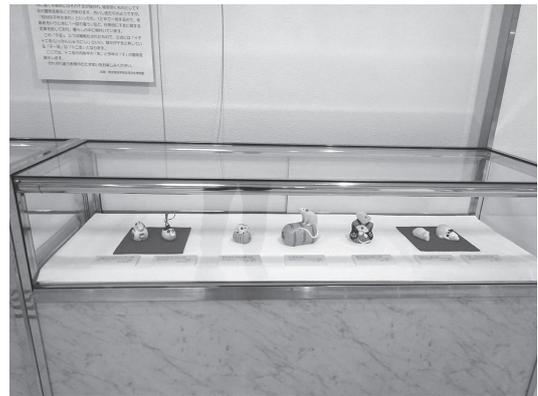


写真12 ねずみの土人形

#### ※展示資料リスト

名称	年代	大きさ (cm)	製作者
ねずみ鈴(のごみ人形)	平成17(2005)年	4.6 × 4.1 × 7.1	佐賀県 のごみ人形工房
いのしし鈴(のごみ人形)	平成17(2005)年	4.6 × 3.9 × 6.8	佐賀県 のごみ人形工房
小槌ねずみ鈴(のごみ人形)	平成17(2005)年	5.9 × 4.6 × 6.4	佐賀県 のごみ人形工房
もち乗りいのこ鈴(のごみ人形)	平成17(2005)年	6.6 × 4.6 × 5.8	佐賀県 のごみ人形工房
扇持ち鼠(中津川人形)	平成18(2006)年	10.0 × 7.8 × 5.7	福島県 青柳 守彦
俵ねずみ(大和出雲人形)	平成19(2007)年	5.9 × 5.7 × 4.4	奈良県 水野 佳珠
いのしし(大和出雲人形)	平成19(2007)年	6.1 × 11.8 × 4.9	奈良県 水野 佳珠
いのしし乗り(大和出雲人形)	平成19(2007)年	13.2 × 17.7 × 7.0	奈良県 水野 佳珠
ねずみ(八橋人形)	平成21(2009)年	3.6 × 3.4 × 6.8	秋田県 道川 トモ
いのしし(八橋人形)	平成21(2009)年	4.8 × 2.7 × 8.9	秋田県 道川 トモ
子(長浜人形)	平成23(2011)年	11.8 × 12.0 × 9.0	島根県 日下 義明
亥(長浜人形)	平成23(2011)年	12.0 × 25.2 × 11.9	島根県 日下 義明
干支 ねずみ(中野人形)	平成29(2017)年	5.0 × 5.1 × 8.7	長野県 奈良 由起夫